粟田日記

下

X
a 12

Kitasato Memorial Medical Library

F
ア-12

914.5
Aw
3
No.1186

慶應義塾大學醫學部北里圖書

慶應義塾大学医学情報センター 47.年7.月19日

富士川文庫
3613

栗田日記

畑維竜識

凌しき廿日十月には諸国の神達も神無月あれ
まうりたまふとなりけり今は出雲大社へあつまりたまふ
といふ時ころは出雲の国なる夜陰に門さして往き
ふものたまとゆふ兼好のむかしより凡四百年を経たる
にくらう妲多の おほし蛾の多く集まるよ
ふを熊野まうでといふもむかし人の熊野
まうでもしこと多く時にて出すること始も

なりたりしハ伊勢まふでといふ無し
元服なりとも衣冠の家のみなり髪を剃を
いりて元服といふやむかしハ喪服といふを今を
振と并いつりよ徳川の御かわり家臣をいふら
かりなき

旧事記云神武天皇元年皇子大夫臣連卒伴
造国造賀正朝拝云々 按るに神武天皇
元年ハ周恵王十七年にあたる事ハ漢の書記
なれとも四百六十余年の遣唐使のかよふさらし

まだ君臣乃道ハさだまらざりけれハ朝廷の儀式
なりしといふ無りけん 遣唐使ありしより来往
しげくなりて後に漢和比隣のごとしされども
して朝家より異邦のことを志らせたまふ風俗
となりぬ 遣唐使無くして漢和の界を果の
ごとし しかれども本山より生まれしハ西木空に
首さし 波濤萬里を無てしきとも天地
活字の生産材なくさかりし我の歌ふかりける
ごとし 彼地より渡りたる加ちの家邦

にとつかりてそれぞれの理的然なりしかれは
こともなく百年とすぎれは都にもあやしき吉徳
繁の緒より衣裳の風流模様なとのあまた
鄙までもうつり行事四時のうつりかはるに
ことし

尾州に南京喬卿といふ儒者あり其父何某と
いふもの剣槍に修練をつくしたりその門人幾
そばく或日一少年来り贄をもって門人と
なる朝夕修練それぞれのしるしに剣槍の術

大にすゝみ三年過ぬるうち免をもゆるすの修行
まことのいたりとなく感称し其後其の年す
ぎりて晩年て去りぬ絶て其のかのか年外に
ありしく父の術をうけ名をあらはしそのおも
むきを喬卿其の友紀平洲に語し財平洲
百人笑ヶ頭に一番とするといひきかす川の
流て術けりは足につきとるにあふさましは学ひ
く其用はなすものなりたとへて法術の揚ら
射る人の馬乗るもしたとするやうなたとへはいつ

ゟ堂にの守り盛り入る事かくんや
我邦ハ武備ニして宝家をおさむ家ゆ史ニ東夷
の夷ハ人家ニ字ニ弓を付たるなりといふハ多ふへし
人字ニ弓を合したる字なり夷ハ字の上に
一畫をたるけハ夷なり夷ニあれ东夷といふも
よ他称をいふすかりも凡ましく世のうらみ也
夫用ひるハ武事をむねとしける漢高祖唐太宗の
ことく開国の祖なる君ハ皆弓馬より起る武事
ハ我邦のミつとめるにあらハ井蛙の見といふ

廼し
星象耕ぬるゟ農民より出しきハなし大和
なる水の名にて国なれハ四月頃より蔓乃乃
ハ種おろし或ハ夜陰の露ありきまちて苗の
出かゝと知り米穀の熟と不熟を識あらし死
はかり知りすなわちここに星たに加へてすきれし
まとうわしく忘しなかしやゝの名を付しこ係
の星ハ何所ゟ何の地に出らる何所りなんの
侯に出のを覚えてしくことを日つとめて見る付る

る亀鑑もたぐひなし暦算者の義をすゝさ
をしへ知らるなり尚書周官篇に志るされ
まつりは絶訓の要務なれは深く聖人のこゝろを致
とゞめてまつるべし
飛鴿の虎り蛇ゝの夕もいま鬼となれり
手か家も承称をり客りそうけいあひと
いふを叛状鯉に乳して在りしこと人に見きたり
時は妖性をなすといふ
御許に藥苑を設ましたふへるとぞいふなり

はじまりけるやはるかふにきこしたる統字を式は
云ひすゝへ撿非違使の廳の節に藥桐をめすなる
ときてり藥は詮をよく蕃なり桐は罷有るも
のとこさる蕃なりといふ説あり金加流の穿鑿
にちらし
天暦丙午年有り承より　禁中へ白烏よく
りつりて紀元毛の鳥を献せしとうり公卿百官
みなし佳瑞なりとよろこひつゝし上表たてまつる
て聖朝を賀し惠此時九條實尚公摂政をまし

Kitasato Memorial Medical Library

まかりしハ一とせ関ふ下りまかりて一宗の御法たまはり
行れハ公の達ハおほしく於ける殿下白毛羽純白於
らハ端となしへし鴻の羽色ならしかふさまは鶯
と鶏とましまして生しまゐるものなくんうし志るし
ハ賀表々に呈して後と伏原三位殿ハ不吉の兆なり
とのたまひけるを翌年戊申のとし果して京都
罹災の変ありて大内も災上ありしかる予家
も没して白川橋のたもとに隠居す庭樹にあ
やしきかふるの来りしも前の年 梅津へ

献でしものハもちまゐらせ殿下のかひしよく
毛色純白なりて河決西洪の人々賀表皆反故
となりぬ
婦人児女子ハ拍のことを川かととまるひく横去
らねとかたしも鶏を男児としてこれと覚ゆべき
ハ婦人児女子におよまり
おのまことえらといへとも襄斂ありて恵なき家ハ
元より孫かたはす松とりふ身まかりしといへとも善
根ありく人至患をふうきものハ子孫らずなりて次

Kitasato Memorial Medical Library

きらめくものハむかしより かしこき人の詞にも
四十年来ましくことに露きえけるとに
酒肉をくらふ族の法山比丘よりへたりならば僧位僧
觀音ではいのちをうけらまし かうこ徳の門なるを
盛して菱知のまかりたの聖天あるまじき所の
志深く感ありこうなりより将来始とやらん
冨貴ハ随意に官位僧正まてく なりすへしとはし
すゝめられハ法山いらく怒り罵て 貪道死と洲
川ふなけれついそれの人まに 冨貴を祈らんや

はさ文官僧正をゝまんするも家の東寺なれ
昔よりハかれ邪神を祈るをうけし事まて
分しなりとまりより 法くふ不動王にいのり
をうけ障礙を払しぬきたるを法山まうして屈かれ
深不動といのりて終にその家を遂けるとなん
今にその聖天と法山と記きたり 以てる護摩壇あり
いふなるハ 後の附会もあるべし へりきと法山の
志のまことにすゝめ 感すへし 名字冨貴といの
すして道のまことに丹誠を出させんせまし

Kitasato Memorial Medical Library

いとうちうち續なり

書画を歴観するの用意もかくのごとくなり　東厓

翁詩あり

童幼奴僕共鼠邊燈下煙中梅

雨天醉後臙前怡裏切戒書生謹繕編

呂覧曰盡荊越之竹不能書いふはしくおほく紙

簡をとるなりしとはるを知べし今より是とえ

書は危しき事におほ白朱文公の説ありとも

詩經注解に横は悪本なりといへり今は様の用

楮なりけるとおほしは皮をたゝきて紙を製し

今本邦は山民杖となして是をたきゞにするなり

とす

慶長乃比神祖駿府の城に惺窩道春二人を

召されて新書の是を定めさせ給ひ後に湯武征

伐のことをとはせ給ふ時道春ハ答ふ惺窩翁は

是より病に托して退出せられけるとひそかに

道春は其春ハ東都に侍側ふかく仕へて法印

なりしとなり聯芳乃ち頃義出来の是なる　東崖

のこしいつ嗟茶とし名をはれともんせ
爲堂なりき
きたらさの頃なりけるにやまちにきたりて栂尾
に植ゑてしをとり妙恵上人その茂をとりて
をはしめて是をうへしその製古雅にして亀されは
かくに紀伊あり上人はきこしく登せられし
やうに忍ひしまさいらんて旅装まいりてその
あとをまされはとたん志とけにしかその
神はらく思へしその時北條泰時ふかく妙恵に梅

供しぬるを捨し海山を隔て遥に國の西天
竺中までさかりし稱号の遠ともならんよりは
一人の泰時を教化して我邦の蒼生を恵む
ものの功徳西遊せしよりは遥に勝れて覚ゆ
心越禅師は漢の關雲長か苗裔なり我邦に帰化
し水戸侯の懇になりしかは侯も名将の
子孫なるを志りひそかにみめよき女をもちて
還俗せしめんとそありけるをかたくまもりて辞した
なれは其後江都の深川に久しくすみけり心越

Kitasato Memorial Medical Library

律呂の學に委しく徂来翁の家に師来の琴
有しを吹ことありといへとも徂徠に為して由
翁豪邁の人なれは兒輩のもてあそふへからすとて公然
をんなりけす終に琴かえて門をも出し翁没
して人よりもやすく云禅師より船来の琴を家に
求めに製せんと思ひしかとも巧者ありといふも外
にありかたく以て製することをせんとてよく
其容痕をうつしいひさしくまことに心誠をつくしけらく
ままに作りぬ然るにいとやすらかなりしの事なりし

ますますかくあらんとおもふなりといひき徂徠翁
はしめ先生を凡庸なる也を賞しき
稲來脩叔は好古の癖あり一とせ大和の法隆寺に
村上天皇秘蔵し給ひしところの雷氏乃琴を今
寺に傳へ宝としけるとかの地にいたりて琴をこひ
つけ筆をとりてひそかに圖にうつしける監司の一僧
来り見とかめて大に怒りかゝる重寶の器械
思ふままにうつしぬる事くせことなりとて圖械
とりあけ脩叔をその所の里長のもとに

ちゑんすちりの人付て京に出へしやすさりしまハ脩学
もすへきなかさなき一首の和歌をよまてたひのの志
りのきの部をふとりて監国の修り志ありれ
いての脩ふりて感賞し見て脩学をゆりしき志
の厚地をあらましとせ寫り什物を出し脩慶う
證とにすゑくらつさしむ孔雀楼集ら見る名の
脩の名と和斎とよぶしめるハ惜むへし
芳溪云脩学まさて亦此琴ハ唐法ちよの法
物なりとそ予みる小庫宝元中の作と記者

の名も京付たり法隆ちよあれハむたち?なるへし
明石の深田深沢翁一とて京辺に於て観ては的へ
久しくもしと予て張鈹て我まて馬の大郁むり
せし所予云瀬川ハ顕称ら画とふきいへは
翁云瀬川ハ堪務河の三水に加りて山川の京
とみてもえところおほき地なり詳ら夜泊の舟
ハ兆岩のあそまあるさいなしともいろくむちりこの
ゆるを秋泊にすゑたらんやひとてとにたちむとも
あらしと云へぬ

大日本史の書記しゝところハ根メ氏ハ薩州の
家臣ニ根メ氏あり其祖ハ小松内府重盛なるに
内府の没日印行乃野史ニ載するところと異なり
寿永年中内府なく私族の驕暴をなせし後
世ハ子孫のものハ血命なからんと移らんとなり
黄金を呉城乃醫王山ニ寄附なして祈し田宅
を薩摩の地ニ買置おのれ身死したりといへり
よりて窮ニ西州へ閉行しつゝ後薩州にて一男
児を誕生せしなり今ニ根メ氏ハ内府の

子孫なりとなん蓋公日本史撰述の時此秘事を
謹とせましてと薩州の人ニ尋ねたり文長則
阿猶泥幸ニかくもなる事にあれの是非明らかならざる
事いまだおぼつかなきとそんず
實録なく又稽なるものあり戦爭の世なれば記
録なるものハかくも有るまじ雁ハいふべきなり
かゝる由へ子孫も其家ニ存なりつかの所の
諸族なりけるとあるものなり
細川頼之の後胤ハ丹波播州村といふ所ニあり

Kitasato Memorial Medical Library

彩之より瞻綿しける血脈なり家に傳へたる什
物ありし阿波侯の家臣に細川之好なるの
舊臣ありといふ細川家の夜実ハもと姓まり
緞魚のかくおもひとるく婚儀なるとまおもひハ月あまり
ものなり去られともかつもひと磨斗に因ゆるハ同
しなれども名なきハ吉とも凶ともなきなり
海瀕の国なるとてハあるひとゝりて刀をて落くまう
ともさ男女とたえなるゝてたかひにむさのご
むすなうされハのむ沢といふまへにその歩年の

男女をむすびて夫婦となしまて磨斗を吉なり
まとあうあうとなり
惺窩先生幽棲乃地ハ鷹ヶ峯の北なる市原と
いふところなり北肉ハその市原の山の名なりとい
ふ故に北肉山人と称し也
神武天皇の陵ハ畝傍山のかたはら橿原村
にありて今ハ荒廃の地なり一株の松ある
のみ経乃色久すらぬにその志をしるしと止めし
よそし千古の遺恨なるにこの天皇ハ人皇の国

のはしめにして雲陵のあるしと世々なれ帝王
再興の叡慮おはしましける大闕曲といふ一つも
なき人の墳墓いまもめくみさるへきふとそい
ふかりしも天にとゝめ
またむかしより月に行ひて道にまよひ農家に
食をこひ日くれては牛をかり仏樹をおひしか
きかしもあるとさへりてまち乃ほうき神前にを
ほしなき所に奉する燈のひかりともかへ
にひとつの菴をむすひて身をいそかしくせしは

家との僧房ともいへて志ありて都に住すとて笑
客は行純の人まて都の方とめかふ所のちれ
とらき天狗てふものゝ人に化してかくいふやとおは
やしむ僧の多くまほしおふかたみえて阿字を観ずる
こと久しく身に世の患のいつくひたむれは勤行おこ
らさ今にては人の喜ひとこひとふのことこと
なさしく家をおこし国の人たちの喜を耳にきゝ
めつらしやうしく覚なしぬるは夜の座をへて松をは
らんといふ声に出て勤めよと喧しく嫉しくまうすを

とけ給ひしにうらみもなく国主の人々もうと
神も感にかなはんとすゝめて旅宿かりてあふ
翌日亭をたちさりて此所よりみえくる名ところ
名しく詩し和し白亭か観遊の一奇なりおもひ
出しまゝに旅寝しきたりし如
南部の飯岡坂といふ所に学道のきこえある
僧のありおもしろく都に風譚といふ名僧あり
これも華厳宗と兼学しをり学道なるか故に
つねに讃書のよりしきみひとつふたつ器量

のごとくなるか般若坂のほとりあつまる座中ふに加へ
りくいつくなやめり風譚これを哀れみ備へ
延命酒といふものをもとめて南都におもむく
其のひとをのかりとひ給ひその旋的をしるべく
師につきさりしかば風譚云此の病を治するは
易くきまりごとしや此薬をもちひなばいか
なりし盛ずし禄かろくはあつくひたんさん語を
人事を勤めしかいやまて毎日ましなかり
いつ流もすくなきに御に年をふりし論しけるは

かの光りまつることく風潭ハわかつましき友
としまじはる人なりかく松川孫さへしるそ
られしのきとて人に告すけるまく病床に
そくむ人いまゐるハ風潭もともにめすると
えてなんとなし松わさん人とら一瓶の酒を携
つ従等となく松ときてあいとのにくるひなふ
文なきつふ盃すめ光しらうち解ける歓を
きわめけしく二人酒ともの志をしらしく物語て
なくしきりまと学道の名をわすきぬ二人のほ

かる晋人の風味わすれいと覚えし
霊元帝の御時度くへつか茶碗を三百金乃價
とやとくとえんさせ給ふ主上のふかく光花
をひつろく清茶光ささせ給ふハ公卿達も皆く
おんけちへるの時勧修寺一位殿といへる
年の公卿なるの事ぞく主上不快なおん
ちしれハ扨小臣年老たけハ月々なくまくる
とくはしめて日のひらくとうけてちそて出し
つくえらきしきいやまつく石よりおもしわ

Kitasato Memorial Medical Library

くらう紀州在所にありしいふなりしにん勇をそれなを
わかりく一條良いとまもやみ清盛にすゝみて
云小臣かゝ重盛をおもふて重盛に申して文
書ひ成してこの金器をくさるる重貴のかゞみ
のうち宋国のことひあらしなるゝ器をふたゝめて
さるひとの價を得ゆへしましまにといふや
しるき義ハかくしくうまつりたるとつね
にさもあるに盛しく今の時やまちハ小臣の忠誠
にてまいることのなりとや行けらどもれハ主上も

賢明の君にてましますきかひふかくかんしるの策
碗およそもかれきかりしと数
黒田長政ハ生けるにさかんとのぬたるの重姪徳
ありたる人ゟ黄金五十枚ゟ一ツの花瓶を買たると
聞てその家ゟゆきてその器をうつてゐたりしく
かけられ命ゟ一位殿ハ忠臣なり長政ハ其身
姪を教訓すといふ事し
古の言しりの教ゟ父母死して子孫なりとの其の
父母乃名を辱身いたして切りにもかかへんにそなへ

Kitasato Memorial Medical Library

よて先志のいはるより杉らきなるなり曽祖半
兵衛をたしなく曽子孫半兵衛をくはなること
先考松尾氏ゆかりて後親族とも集りて家児
より先考の名をつかしむ母氏長瀬いふなりれ
きをしの後予かうかくいふ父母身まかりもの
名をいかなるものは杉の森のなり詠ありおくる
し妻ありもの家子の名をよひく良人の名より
まさつらず不窮といふ毎し松の名をよふより
窮かいやれ後半をしてけふ云て子孫のものなり

識しけることかうかれきは何毎の云もして乃哉
にかなひういときは雑し肝に銘して覚えや
阿波まて三好長慶かれしといふ田地證文をみ
るあらしに手跡もつきなくみも鄙陋にきたな
くて農業よりものの風俗なり雅史に載し
ことき威権ある人のせいにはかなうき
好事のものの友なるよりは細川頼之宗の町
殿の勘気をうけて丹州にて庵をむすびて清次郎
よりちなみのえて書牘杉の森しとふるの孫

Kitasato Memorial Medical Library

風俗にならひて此扇をなすめしより濫觴なりとも川
の事如くなれバ人のならはしは語より多くあれバ
よりこの事世に残る也
草紙物語なとにもあらしやとかかる事に檳榔
子とかかるハ語りなりもあらハ蒲葵のことし
寛政庚は乃天清遠寺[illegible]られし
上皇の召されしはひろう車なり薩摩より献せ
られし蒲葵なく清車のうへをおほひ
席ふくみ御車なり蒲葵ハ薩摩国に産し

土佐の南に流寓せり蒲葵斗ある島なりとも延
喜式に筑前大宰府より檳榔子献せりとあり
今和産の檳榔子あるをこれむかしの蒲葵
を檳榔といひしと見ゆ
新古今集 後鳥羽院御製
松もひともに檳榔葉の中にすむ
むやみられしいろをかへ身に
はるかなるふるきにとしへて白石翁の説にも
葉とかへる蒲葵ハ 文廟御代以後の説なり

Kitasato Memorial Medical Library

とらや予勤仕の暇にあしきも此事に感して
師父の悲たるを於もひ出せるや有り八家の脈
派となり婦なる者の難青山氏と云るも世
にありて消らぬ名をとむらぬ青山氏海
をりて三十年にちかし婦人のはてまかと
この志ありとて此もの脈を遣しもと京
勢へ来り今に此ものは其翁の上に於て
味といつる名字を出せぬるもいくるかのはてま
かくこの志ありとするものなるし

葛云京極殿の蕃後をことと為し居給ひ於
きなり　文照りに後京極殿をはそらも
亳的肖せり

回禄記乃事

四海波をしつかに風條をならさぬ御代にも
騒擾なる事あるものなり予かまさしく覚
えしは寛（天）政（明）申ノ年回禄なり正月晦日の夜
すさましき嫉みの忌日にあたりそのいみしく侍りし
ふと東よりはけしき風いと烈しく
禁裡を始として所々もえひろかり焼出といふ万不
より一炎の火となりて東西南北にひろかりて
ひろかりたることきこえありて焼る家数十万余戸

Kitasato Memorial Medical Library

近年息土と定りぬるこそ今古未曽有の大
小便人といへるものゝ其儀ハ竟に書のこして子
孫のための抱珍といはしめむことにやとおもひたち
歳月をつもりかきしるしいへるとなしてともむり
かゝるのやまひに費をいひてうちすてぬるこそ惜し
日記てふものかきしるして筆の後にものこさ
まことをおほえしまゝにかいつけぬる悔むの
中にも門外不出と申せしく東西にちらさ
さけふさ夜枕となす書の数をもふやさまほしといとさらに

われハ雨もいとはずのこゝろにてやすらかにたちなから
先出ものゝ紀の玉のはやき瀬のさかしく流れて
なかひさ西へゆきひたすらさわなく杉ある
ほひなとにたえくれたることつきとれとの
始もそひに術なく火なるをたづね屯して
かのかゝ備となすのこゝなり次第に従もちろ
なりわれハをみなるにハ上加茂の祖父なる
御身のために家厳ハ風雅の往ほし
もくれハいつもりあるともろ〳〵塾に

しの営一ツ人をもつさへ夜も昼もちの
の孫をもつ子さへすつり妲孫しもすゝまうと
ありくつりえきは我の違背をうけて此川
きえんともちろうふ日もくまして行きさ
まりひきたより孫とも火かくろこ孫やりし
秋の海のうへいつり筆は先老をいまうり
し孫をもむまあつまり十まゐし如男女
わさなまこものも四千人ふあすまり家をて
おのゝ衛をすかく夜をあかし如かくろ孫は一宗ち

むかふ初への事のいろてをもの々ゐまう如屋す
うられは着さは老たるを為すけ或は村さなき銭
金川まへ笠をもり扇をさつく手はいの猿引たる
あり袴つけて物をひきたるあり弱を篭ふ
いまでたまふ琵琶抱ける童子ありあをみなふ
下僕なまた衣つまを手ふとのともちふ如はなし
やふ竜一宗ち村ふ生とり身はあつしの翁の
ちまうかく畑ふ薪をく鍬く熟夢ほすもえ
いち孫もの孫ふつちうぬ竿を志しのあ川き

Kitasato Memorial Medical Library

するくかくは何もくれ給へれは松をおんなのと
まちもなくうちまもりてつきまかり出ては夜
翁とても像のたよりのまゝきりしといふもの
有るを守りて路るないかなるものいろくそてるくは
さり出て多川ぬきとも消息なきには志ろめの
なし皆うちよりてしつまりていふかゝる所のなんかり
かへり清わやのこゝろうしなひたるはなにゆへ尓
くさりて家蔵に寿まへりやと人を痛みて
いろくあつかふ像よりとのあらしのとのを流ちり

すつ魚にやとなつむきとも人の魂なきはいろくなく
んものとあやしとおもひて子卿斗の外より
戸をたゝくものあり誰なるらんと問へは我奴
の翁なりといらへしてむかへいれしはそのもの
こゝまの翁は加茂の祠官の家にたしかに鏡
けぬるといふを守皆しよろこひの眉を開きまた
よりとけたくまとろひすくに奴をしらせて
神道のもとなる翁なりて猶へり思翠百丈山翁
の詩仙堂にまさる清は老尾の住てまよ

Kitasato Memorial Medical Library

らかなる精舎なれともいかなる人の
ほとけかたはしくきこえ侍る人また十二家
ときこえしは翌言己の列なりしなる
言の古き事のさましてちか立路一条の村をすき
路をとほりて家隆の猶子のかたにて尋けれは
なく行あひたるなとなきこともいはれねは家かたと見る我居所
なまいはいかにもあれりかなまてしとのいふ事もあり
やて志りしは古路かうまほへ戦争の比迷まよふ
花とやいふ無事家隆擢術のよみましつる

なまじはこゝに行先ゝまして如何にやらむ果の家の名
まかりまかり承護院の衰まで移りし給へるを
うつりゆくも知らむ道すから焼ける所とおほ
しきあとの家にはあるまじき覚えて世に
かゝる事も有りけるものかなと皆ゝかなふ
亀川の布とも誰とも定かならぬ家の調度什
物とちつひに数もかきらぬ雅のちく
ちくおなしくなくもいかりまた老たるを見るにしるし
行衛人を知る思ひも有りて書は文とよむ文

は妻とおほしきのふもつきてしてけり
たおやかなる女にも又にぞ見ゆ稲荷の古西
宗らかるの前栽のかとちくなるうちにさむらひ
まぎらはし 集をかる庭に梅の咲けるはいと
誰かかもとのなまれは奴婢は心なく衣裳
うちかけなどもすなるに翌日白川橋なる林
何某法眼のいともおもしくことなかりけるなる
志きしまとの家のうちもむくいとまして加
まうかにうましく あるへきまゝ翌年人来り

乃人おほえはらむしらにうちもきゝく
志りしすかおほえらるまで都翌年に
ゟ川の翌庭に老なる杉の家居ありし庭の
菓子所などおもしきうまくあるのあしには
は古郷まとひ水してことしも古訪曲比所に
粟田の御所にて尊覚親王のすみたまひし殿より
此所は河川まで厳命かゝもり 禁中の
警護としての官人柳の歯をひくとよくし
其の衣装いみじく集りて御代に

Kitasato Memorial Medical Library

めつらかなる事あれはあまた三とせの月日を消して
やくもとのふしゝかくあつめ人々数多ありてきぬ
小西氏林氏吉田氏栗田氏田並氏なとそ俳諧
家好ミて月にうそふき花にあくかれ或ハちや
の湯なとしもて遊やくさをなくさむ人々
この外に三熊氏画に名あり端文仲ハ詩に
名あり六如上人の中にもこの京の広にいきなるれ
てまありしるもたつとみも世にさしも表なるも
杉さたまなて かの我もくよくにあるハありけよらし

むかしの筆物かゝりに肝脳地にまみれとかいへとも
かゝるのぶなるへしかゝるうきことかきあつめ
を子孫に遺しあるく読者のこゝろをおさへ
なかく千歳の家をもまもらんことを祈るものなり
なれよかしこの編のもしあらハならにそ此時の
梓と書とみなく粟田口記といふ

寛政癸丑中元日

Kitasato Memorial Medical Library

Kitasato Memorial Medical Library